

歴史・文化サイトカード

通しNo.		2-D-2	更新日	2025/2/10
サイト名		い う かどべのおおきみ 意宇平野にある出雲国府の情景～門部王の万葉集		
基本情報	区分	☐ 有形 ☒ 無形 ☐ その他		
	所在地	松江市大草町他		
	周辺施設／アクセス	☐ トイレ ☐ 売店 ☐ 食店 ☐ 駐車場（台程度） ☐ 周辺施設（八雲立つ風土記の丘、国庁跡辺、阿太加夜神社、神魂神社、山代二子塚古墳など）		
				
サイトの解説	歴史・文化	奈良時代から平安時代に、全国60余国にそれぞれの国における地方政治の中心となる国府がつくられ、出雲国では奈良時代のはじめ(690年頃)意宇平野に設けられた。国府周辺には、古墳時代に山代二子塚古墳などの前方後方墳、大型方墳、多数の横穴墓群が築かれ、墳墓の被葬者となる力を持った人々が連綿と暮らし続けた六所神社周辺(松江市大草町)がある。国府には、中央から派遣された国司の館や、役所群、生産工房が置かれ、また、周囲には瓦を葺いた国分寺や国分尼寺といった大型寺院が建立され、当時の一大官公庁街であった。出雲国府跡から漆紙文書、土器・硯・文書箱、木簡等が出土している。 門部王(かどべのおおきみ)は、天武天皇の曾孫にあたり、中央での地位も高く、力があつたと考えられ、風土記が編纂される頃に出雲国司として赴任していたとされ、万葉集に歌を書いている。 「飢宇(おう)の海の 潮干(しほひ)の渦(かた)の 片思(かたも)に 思ひや行かむ 道の長手(ながて)を」 この歌は、門部王は出雲国司のとき部内の女性を娶(めと)ったが、しばらくして通わなくなった。月日を経て、愛情が芽生え、この歌を贈ったとされている。 「意宇(おう)の海の 河原(かはら)の千鳥(ちどり) 汝が鳴けば 我が佐保川(さほか)の 思ほゆらくに」 この歌の「意宇の海の河原」は、出雲国府の近くを流れている川で、門部王が出雲守として赴任していたときに詠んだ歌である。この歌碑や、意宇川岸に立っている門部王の絵が、阿太加夜神社で見られる。		
	地形・地質、生物・生態等	意宇平野は東西5km、南北3kmの平野で、およそ3万年前の河川堆積物を最下底にしている。縄文海進(山陰地域では6500から7000年前頃)以降の海面低下にともなって、意宇川(いうがわ)が三角州を形成し、縄文時代の後期には湿地を残しながら陸化したと考えられている。遺跡の分布とボーリング調査から、意宇川は縄文時代の後期・晩期から弥生時代には平野の北部、弥生時代後期には平野の中央を流れていたとされる。河道の流路変化に合わせるように遺跡も平野北部の周辺から中央部へと広がっている。5世紀末には、中央の河道は廃棄され現河道付近に流れが変わったとされる。この時期、遺構・遺跡も平野内に広く分布するようになった。このように、意宇平野が古代出雲文化の発祥の地とされる所以は、古代の水田開発に対する高度な土木技術力、そしてそれを可能にした平野のほどよい規模であつたと考えられている。加えて季節風を弱める北西側の山地や中海への利便性など、出雲の中で最も地の利を得た場であつたことにも留意したい。		
写真・図等				
参考文献		阿太加夜神社の歌碑 阿太加夜神社にある門部王が意宇川に立つ絵		